

『津軽英麿伝』

蝦名庸一

昭和三十八年を以て創立五十周年を迎えた陸奥史談会が、その記念事業として刊行したものが本書である。船水武五郎氏の未定稿である『津軽英麿公御履歴』を底本として、弘前大学の羽賀与七郎教授が執筆を担当している。照子未亡人より英麿公に關係のある写真や書簡を多数提供されたほか、船木氏の助手として津軽伯爵家伝記編纂所で資料の収集整理に当った船越守夫氏の考証料による所も多かったようである（はしがき）。しかし羽賀教授の綿密な原史料の探訪と研究によって、全く面目を新たにして、英麿伝としては今のところ決定版として出来上ったといつてよいであろう。

内容は大きく三編に分れ、才一編 ドイツ留學以前才二編 ドイツ留學時代、才三編 帰朝以後ととなつてゐる。才一編からみていくと、才一章 近衛家の頃では、英麿が明治五年二月二十九日、近衛忠房の次男として出生したことにはじまり、父忠房にわずか生後四ヶ月で死別したことや、津軽家によく遊びにいったこと、そして後嗣のなかつた津軽承昭の養子となる経緯を述べている。この養子縁組は近衛家と津軽家との古くからの

親族關係に由来することであり、津軽家の使者が英麿を迎へることのできた喜びは近衛篤磨（英麿の令兄）の使者への送辞（本書七ページ）によく表現されている。才二章 津軽家入奥とドイツ留學の項では、津軽家へ入るときの状況を細叙するとともに、幼少期の留學について特に向學此の旺盛でありたことを、家庭教師に日課表を自ら差出して奮勵していることなどを上げて述べている。また文章にすぐれていたことは、十二才のとき而國の川崎ぎにいった冊の作文がよく示す（一五ページ）。しかし幼年期の性情は激しい面もあり、また短慮なこと、も箇々あつたことを記しており、単に褒めることに終りがちな普通の藩公の伝記と違って、客観的な態度を堅持していることは当然とはいひながら、旧藩主につながるいわば、殿様を叙述する津軽人としてはかなり勇氣を要したところと考えられる。ドイツ留學については、その動機を英麿自身の『航海紀行』を引用して詳細に述べ、更兄近衛篤磨の勧めもさることながら、彼自身の殿様流儀の養育から独立しようとの強い願いが、留學を可能にさせたことを明かにしている。

オ二編 ドイツ留學時代 には全体の約三分の一の百ページをあて、十五歳から三十三歳までの時期を取扱っている。先ずオ一章 ベルリンまでの旅程 では、明治十九年十一月十六日、横浜出港から明治二十年一月一日ベルリンに着き、それからボン大学のライン博士の家に滞在くまでの動靜を、彼の『航海日記』や隨行者斎藤雄の『独逸航行日記』(稿本)によって詳しく述べる。途中、広東・シンガポール・コロンボ・スエズ運河などでの見聞は、今から約八十年前のものだけに、今日の旅行記と比較されて面白味があり、貴重な記録である。

オ二章 ボン・ジュネーヌ時代 では、大抵に青春時代を樂しむとともに勉學にも励んだ様子が書かれている。ライン博士の家に三ヶ月程滞在して後は、令兄篤麿の養休みを利用して一緒に小旅行を試みたり、篤麿の誕生祝いに打興じたり、アルプス踏破をしたりしている。また外回語に習熟するために、エーレンスライトスタインに移り、二年ほどドイツ語とフランス語を勉強して再びボンのライン博士の家に寄寓する。そして明治二十二年四月ボン市立レアルルプロリギムナジウムの入學試験を受けて合格し、三級の上に編入された。明治二十四年三月には、優等の成績で二級の下を修了し、ボンの国立ギムナジウムに転校するため、退學して編入試験に必要な學科の準備をしている。これに一カ年を費し、二十五年四月にボン国立ギムナジウムに合格し、一級下に編入さ

れた。二カ年在學して優秀な成績で同校を卒業、二十七年五月にはボン国立大学に入學、ここで法律學・經濟學の講義を聞く。二十八年五月にはスイスのジュネーヌ大学にうつり、民法・比較法制學・經濟學などを修めた。このボン・ジュネーヌ時代の記述は、英麿や篤麿・承昭・忠燕の手紙或は英麿の東與義塾同窓会雜誌「學友通信」への投稿文などによって記述している。

オ三章 ベルリン時代 は、明治二十八年十一月ベルリン大学に籍を置いて、専門の法律學の研究に従事してから、再三留學地勸業を出して留學期間を延長し、遂に明治三十七年二月末東京に帰るまでの期間を扱っている。ベルリン大学での研究の狀況は、修了し或は履習留のあの科目をあけることで明らかにする。明治三十二年には令兄篤麿が特命による海外視察で歐洲を訪問するが、その際英麿も同行して七月中旬から八月下旬まで、ロシア・ルーマニア・トルコ・ギリシア・イタリヤの各國を視察した。英麿の宛明に記録した『東歐旅行日記』をもとにして日を追うて詳細に述べ、それに約二十三ページを費している。再三にわたる帰國の催促にかかわらず英麿の研究は予定通り進まず、延引に延引を続け、遂に母尹子・令兄篤麿の死にもあやないでしまいが、その向留守を守る津軽家岡係者の魚澤をよく佐えている。しかし彼はドイツ語で『日本養子論』を執筆していたのである。英麿のドイツ語は、殆ど完全に近く、ドイツ人と同

じであつたとの英蹻の友人の話を伝えている。『日本養子論』(本文二二六ページ)は、また日本記も出ていないことでもあり、その学門的価値を明らかにするのは困難な問題であるけれども、その主要な内容を紹介するなりして英蹻の学者としての業績をはっきりさせる必要があつたのではないかと思われる。

才三編 帰朝以後 では、明治三十七年の帰朝から大正八年、四十八歳で歿するまでの後半生を取扱う。才一章 帰朝より渡鮮までは先ず帰朝直後の彼の動静を日を追つて記し、諸家へ帰國の挨拶まわりをしたことや帰朝歓迎会が行われたことを述べる。帰國して半年後には、早稲田大学の講師となり、ドイツ民法とローマ法の講義を担当した。帰國の翌年には、政法大学・慶応大学からも講師として招かれ、ドイツ憲法や比較法制史の講義を担当したことなどが記される。さらに津軽家の家範が制定される経緯を明治十五年にさかのぼつて記し、遂に明治三十八年八月に宮内省の認許を得て家範宣誓式が行われたことを述べる。明治三十九年には藩祖為信の三百年祭がその廟所である弘前・華秀寺において行われたが、それに出席のため北海道視察の後、弘前へ向つた。当時の弘前での英蹻の行動を手記や地方紙の報道によつて日を追つて記し、郷党の人々の歓迎ぶりが如実に再現されている。

明治四十年九月には、珍田外務次官等の推挙により、

韓国統監府の法制調査事務を囑託されて朝鮮に渡るが、才二章はこの「在韓時代」を取扱つてゐる。大正三年十一月、京城を引あけるまで、七年滞在したことになるが、その間、病氣になつたりで十分の活躍が出来ないで終つたようである。なおこの章では、甥の近衛文麿に対し、京都大学法科へ転じて機会に、懇切な生活指針を与えてゐることが注目されるのである。その手紙(送詩)の全文が紹介されているが、それは七兄英蹻の親代りとして懇切を極めたもので、今日の青年学徒へも一つの指針としてあてはまるであらう。英蹻の人柄なり、考え方を知るのにも、重要な参考となる。

才三章 宮内省時代 は、大正四年大禮使事務官に任ぜられてから、大正七年皇族院議員に当選するまでの約四年間を扱つてゐる。大正天皇の御大札に南したことにも、津軽家の周迎と英蹻の身辺に南する記事が多いのはもちろんであり、養文承昭の病死と相続、家政の改革、津軽承昭公伝の講義、在京の青森県出身文学者や美術家の団体である六花会のバトロンとして活躍したこと、特に育英事業である青森県奨学会に対し、経済的援助のみならず、精神的援助をし、彼が推進力となつて創立され居ることを大きく取りあげてゐる。奨学会関係だけに約五十ページをさき、その創立から廃止までの歴史を併せて記し、奨学会を知るのにも便宜である。

才四章 貴族院議員時代 では、大正七年七月、國府

者の投票で貴族院議員に当選してより、大正八年四月五日病死するまでの僅か一年位を扱う。貴族院議員としては議会開会中は努めて登壇し、常に議案を精読してその研究を怠らなかつたという。中央政界に雄飛しようという矢先、腦溢血のため四十八歳を以て歿せられたのは痛恨の限りであるが、本章の四以下においては、死にいたるまでの英磨の病状と東京における葬儀の状況を伝へるとともに、当時の新聞をもとに、青森県下各地における哀惜の模様をつぶさに記している。最後に嗣子のなかつた英磨の後嗣として義孝氏が決定するいきさつを述べて本文は終っている。

以上内容の概略を述べたのであるが、次に通読しての感想やら多少批評めいたことを記させてもらいたい。伝記としてまとめる場合、主人公のある時期とか或は活動の一面を重点的にとらえて書くことは、書く例としては割合容易なのではないかと思われるのであるが、本書においては、出生から葬式までの事蹟を編年風に、しかもどこに重点を置くでもなく、平均的に淡々と叙述している。最も信頼性の高い手記とか日記、書簡類に語らせており、正確で詳細な且つ最も客観的な履歴書といつてよいのである。郷党の〇殿様〇に對し特に讚美したりすることもなく、また著者自身の評価は極力さけて、英磨の友人とか親しかつた人をして語らせている。まことに困難な等向的態度を堅持したものと云つて過言ではないで

ある。ただそれだけに、人間英磨の生き生きとした息吹きを伝えるには少し物足りないものを感じさせる。しかしそれは巻頭に收められた照子未亡人の手記が十分つくなつてくれるのである。

人物を時代との相関においてとらえることは難しい向題であるが、本書においても、勿論国内政治の背景を描いてはいるが、年譜を書き並べている程度で、明治なり大正互りの時代相が不十分に思われた。編集上の注文をいへば、才二編ドイツ留学時代の部分には、英磨の足跡をすぐ参照できるようなヨーロッパの略図を入れてもらえればよかつたと思われるし、巻末附録の略年譜は、略とはいえない詳細なもの（三十二ページ）であるから、主なものはゴシックにするとか見易い配慮がほしかつた。また少しばかり誤植が見えるのは残念である。何えば照子未亡人の手記の中、十五ページ四行の「櫻謙次郎」は「梅謙次郎」の向置いであるし、本文二百九ページ終りから四行の「英磨は英磨である」。

ともあれ、珍らしい写真や、史料を豊富に載せ、系図にも苦心の跡が見え、現時点における「津輕英磨伝」の決定版を完成された著者の努力は誰人も認めるところである。

(A) 判、本文三三七ページ

陸奥史談会発行)